

21 世紀を生きる生徒の資質・能力を育む

～SDGs の学習における新聞活用を通して～

佐渡市立新穂中学校

1 学校の概要

「トキのむら新穂」は佐渡の中心に位置し、三つのダムを有する豊かな水源、森林、水田に囲まれた自然豊かな地域である。教育目標「やさしく つよく あたらしく」の下、全校生徒 78 人が学習と諸活動に取り組んでいる。

校区では、学校、保護者、地域が一つとなって子どもたちの教育にあたっている。平成 30 年度発足の学校運営協議会では、あいさつ祭りやわんわんパトロール、お散歩隊といった地域ぐるみの活動を展開し、日本一あいさつの良い地域を目指している。また、佐渡学と称する総合的な学習の時間では、多くの方々からの支援をいただきながら、ふるさと新穂の良さを学んでいる。そして、卒業シーズンには立志元服式を執り行い、生徒の門出を地域全体で祝福する。この式典では、佐渡学を通して学んだふるさとへの思いや自分の今後の生き方を、3 年生一人一人が漢字一字で書き表し、決意をもって学校を巣立っていく。

2 NIE 実践のねらい

(1) 学習指導要領等から

学習指導要領前文（平成 29 年 3 月）には、「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることかができるようにすることが求められる」と明記されている。また、2030 年に向けた学習の枠組み(OECD)には、「最終目標は地球全体のウェル・ビーイング(well-being)の実現で、全ての人々が個人的にも社会的にも健やかに生きることができる未来の創造である」とある。そこで、総合的な学習の時間に SDGs（持続可能な開発目標）の学習を取り入れ、その中で新聞を活用することで、学びをより深め、資質・能力の向上を目指した。

(2) 生徒の実態から

生徒は親和的で穏やかで寛容性が高い。興味・関心を抱いたことには熱心に取り組むことから、知的好奇心の高さがうかがえる。その一方で、令和元年度の全国学力・学習状況調査では、「地域や社会を良くするために何をすべきか考えることがある」が 25%、「地域や社会のできごとに関心がある」が 19.1%、「新聞を読む」が 9.6%、「読解力・思考力・判断力・表現力の A

評価」が 40.3%等で落ち込みが目立つ。そこで、生徒が自ら課題を見つけ、解決に向けて他と意見を交流してより良いものにすることができるようになれば、目指す生徒像に更に近づけると考え本主題を設定した。具体的には、情報を正確に読み取る力、情報を利活用し新たなものやより良いものを創り出す力、他者が表現した「こと」や「もの」を受け止める力、自分の思いや考えを正しく相手に伝える力等を伸ばしたいと考えた。

(3) SDGs の学習から

SDGs の学習における新聞活用を目指した理由は以下の通りである。

- ①生活が教材になるため、生徒が学習を身近に捉えることができる。
- ②生徒の生活経験や既有知識が一定程度共通しているため、同じスタートラインから学習を進めることができる。時には逆転現象が起こる。
- ③これまで総合的な学習の時間で行ってきた「佐渡学」の活用をはじめ、全教育活動との関連を図ることができる。
- ④新学習指導要領で目指す三つの資質・能力を伸長させることができる。

SDGs は今日的課題をグローバルに探求し、実践することができる。新聞を活用することで、SDGs を知り、深め、参画し、広げることがより一層できると思われる。さらには、今後の社会の在り方について、新聞等を活用しながら SDGs の視点で考え、行動に移す汎用性のある単元を創出することで、自校だけではなく他校でもできる実践につながると考えた。

3 本年度実践の概要

(1) 目指す生徒像

身近なことも世界のことも、持続可能な暮らしの観点から、課題とそのつながりを探究し、共に生きる公正な社会の創造のために、地球的課題の解決に向けて主体的・協働的に足元から行動できる生徒。

(2) 目指す資質・能力

①知識・技能

ア 様々な諸課題を自分ごととして捉え、現在および未来の私たちの持続可能な社会に関わっていることを理解できる。

②思考力・判断力・表現力等

イ 自分の思いや考え、調べた内容等を相手に伝わるように発信できる。

ウ 他者が表現したことを受け止め、良さや強みを生かしながら課題解決に挑むことができる。

エ 多様な視点で事象を問い直し、批判的で創造的な思考ができる。

オ 適切な情報を収集し、正確に読み取り、利活用しながら学びや活動を促進することができる。

③学びに向かう力・人間性等

カ 地域や社会の出来事に関心をもち、持続可能な観点からより良くしようと関わろうとすることができる。

キ 多様な文化、習慣、考え方等を理解し、人権や多様性を尊重することができる。

ク 自分の考えや行動で変化を生み出せるという思いをもち、自己肯定感をもつことができる。

(3) 全体構想

①教師は生徒の内面から湧き上がる思いや疑問点を大切に進め、自らも共に考え、悩み、サポートしていく伴走者として関わっていく。

②最初に地球的課題について考える学習をワークショップ形式で3回設定し、生徒の関心と見方を高める。

③今年度（1年次）のプロジェクトチーム（班）は同学年内で組み、実践場所は学校と家庭を主にする。来年度（2年次）は、学年混合でチームを組み、実践場所は地域を主にする。

(4) 単元構成（全 32 時間）

期日	時数	内容	形態
10月5日（月）	1	全体ガイダンス ・世界の現状とSDGs ・今後の流れ	全校
	2	SDGs ワークショップ①「プラスチックゴミ」 講師：関愛さん（長岡大学職員） ・海の生き物ロールプレイ ・ミンカイ村の現実 ・県内各地の取組と私たちにできること	全校
10月12日（月）	2	SDGs ワークショップ②「気候変動」 ・気候変動クイズ ・キリバスの現実 ・気候変動の影響 ・私たちにできること	全校
10月20日（火）	2	SDGs ワークショップ③「水と食」 ・暮らしの中の水 ・エチオピアの少女の1日 ・食べ物から見る水の使用量 ・日本の食の現状と私たちの生活	全校
10月28日（水）	1	テーマ決め（班・個人） ・SDGs ボードゲームで、これまでの学習について振り返るとともに、SDGs の全ゴールについて触れる。 ・「自分が最も何とかしたいと思ったことは何か？ また、それはなぜか？」の問いに個人で考え、ペアや班で共有する。	学年

11 月 6 日（金）	1	課題収集（個人） 新聞の構成や読み方について学び、SDGs に 関連する記事を収集・分類する。	学年
11 月 10 日（火）	1	課題設定①（個人・班） 学年内で興味・関心の近い生徒 4 人前後で班 を作り、まずは個人で課題意識や理想の社会、 理想と現実のギャップから生まれる問いにつ いて考え、班で共有する。	学年
11 月 12 日（木）	1	課題設定②（班・クラス） ・班でテーマや問いに対して「知っているこ と・知るべきこと・思いついたこと」の 3 つ の視点で現状を整理する。 ・クラス全体でギャラリーウォークを行い、 他の班から質問や意見をもらう。 ・班で調べなければいけないことを整理し、 調査方法と分担を決める。	学年
11 月 13 日（金） 11 月 17 日（火）	1 1	調査タイム①②（個人） 班で調べなければいけないこと（なぜそのよ うな状況が生まれたか、現状、解決に向けて 行われていること等）を本、新聞、ネット、イ ンタビュー等複数の方法で調べる。	学年
11 月 18 日（水）	1	調査タイム③（班） 個人で調べたことを班で共有する。	学年
11 月 20 日（金）	1	企画タイム①（個人・班） ・望む現実に向けてできることについて、ま ずは個人で考える。 ・班で意見を出し合い、効果と実現可能性の 二つの軸で整理する。	学年
11 月 24 日（火）	1	企画タイム②（班） ・班でアイデアを絞り、具体的なアクション プランを考える。	学年
11 月 25 日（木）	2	中間発表に向けた準備①②（班） ・中間発表会のもち方と KP 法（紙芝居プレ ゼンテーション法）について確認し、発表の 構成について考える。 ・発表の分担を決め、発表原稿と KP シート を作成する。	学年
11 月 26 日（金）	1	中間発表に向けた練習（班） 各班で発表練習をし、改善を図る。	学年

11月30日(月) 【1年次公開】	1	中間発表会（全体） これまでの調査とアクションプランの内容について発表し、他の班から意見やアイディアを募る。	全校
12月2日(水)	1	実践タイム（班） ・中間発表で得た意見等を参考に、必要に応じてアクションプランを修正する。 ・アクションプランの準備・実践をする。	学年
12月9日(水)	1		
12月17日(木)	1		
学級、学校、家庭、地域等で必要に応じて冬休み中も実践する			
1月8日(金)	1	実践タイム（班）	学年
1月13日(水)	2	全校生徒に対してアクションプランを実行したい班が、全校生徒の前で発表や実践をする。	全校
1月20日(水)	1	実践の振り返り（班）	学年
1月22日(金)	1	最終発表に向けた準備と練習（班）	学年
1月28日(木)	1	中間発表会と同じ KP 法で行い、実践内容と振り返りを付け加え、発表態度も向上させる。	
1月29日(金)	1		
2月2日(火)	2	最終発表会（全体） 実践の成果と課題を発表し、全体を振り返る。	全校

4 実践例

(1) SDGs ワークショップ

単元の最初に、地球的規模の課題を身近なものとして捉え、当事者として課題解決に関わっていくことを目指し、生徒にとって身近なテーマと思われる「プラスチックゴミ」「気候変動」「水と食」についてワークショップ形式で授業を行った。開発教育協会(DEAR)の教材を参考に、各テーマを2時間で構成し、「興味をもつ」「知る」「自分や未来とのつながりについて考える」「自分たちにできることを探る」という流れで行った。特に「興味をもつ」や「知る」という段階では、データや動画、新聞記事等を用いて理解を深めた。以下は、授業で使用した新聞記事の例である。



(2018年11月17日付け、新潟日報) (2019年9月23日付け、新潟日報)

グループワークは縦割りで行うことが多く、上級生が進行や発表を積極的に担い、下級生を引っ張る姿が随所に見られた。全校で行うことで、全生徒が知識を共有し、関心や課題意識を高め合うことができた。



＜生徒の振り返り＞

- ・今まではプラスチックをリサイクルすればいいと思っていたが、それだけではダメだということが分かった。
- ・この 2 時間でプラスチックが他人事ではなくなった。自分も「自分で今できること」をしっかりとやっていこうと思った。
- ・日本は人口はあまり多くないけど、二酸化炭素をたくさん出していてびっくりした。日本は気候変動をもっと重視したほうがいいと思った。気候変動についてみんなが理解し、一人一人が対策をしていけば、もっと被害は防げると思う。
- ・自然に起きる災害もあるけど、人が起こしている災害もあると知った。被害を受けている人や動物がたくさんいた。私はいつか現地に行ってみたいけど、今はネットや本でどんなことが起きているのかを調べて知りたい。家族とも話してみようと思う。
- ・日本の食品ロスが年間約 500 万トンもあり、多くの食べ物が捨てられていることが分かった。料理ではできるだけ使える部分を多くしたり、買い物では必要な物だけを買ったりすれば環境に優しいかと思った。
- ・水の大切さが分かったし、自分や世界の水の使用量も知ることができた。輸入には予想以上にデメリットがあってびっくりした。外国の食べ物は安いけど、佐渡のものをなるべく食べるようにしたいと思った。

(2) 中間発表会

各班の調査内容やアクションプラン等についてより多くの人に興味・関心をもってもらい、他の班の発表や聞き手からの質問や意見等を通してより良いアクションにつなげるために、中間発表会を行った。1～3 年生合同で行い、以下のようにテーマが近い班同士が集まって発表した。

1A 教室	マルチ教室	2A 教室	3A 教室
「差別・不平等」	「海・プラゴミ」	「食・水・衛生」	「教育・気候変動」

計 5 班	計 4 班	計 4 班	計 4 班
-------	-------	-------	-------

発表は「KP（紙芝居プレゼンテーション）法」というやり方で行った。具体的には、キーワードを書いた何枚かの紙（KPシート）を黒板等に貼りながら発表するやり方である。生徒はテーマに興味をもった理由、現実や課題、理想や目標、調べたことやアクションプラン等について、発表の構成を考え、原稿を作成し、大事なポイントをKPシートにまとめていった。

中間発表会は、3年生2名が各教室で司会を担い、以下のように進行的た。

- ①発表各班 4 分
- ②ペチャクチャタイム 1 分
→近くの人と発表について感想を述べたり確認したりする。
- ③発表タイム 3 分
→質問や提案、感想を発表する。
- ④記入タイム 2 分
→質問や提案、感想を一人一人が付箋に書き、班ごとにまとめる。



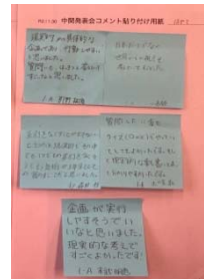
KP 法を用いた発表の様子（関連する新聞記事も活用）



発表タイム



記入タイム



他の班から届けられたコメント



以上を 1 サイクル（10 分程度）として繰り返した。全ての発表が終わったら、班でまとめた付箋を発表した班に届けた。生徒は届けられた付箋に興味深そうに見入っていた。最後に、中間発表会の振り返りを記入し、生徒と教師が振り返りを述べた。

< 生徒の振り返り >

- ・他の班が面白い企画を考えていてすごいと思った。身近な視点でもっと細かいことから取り組もうと思った。
- ・他の班からのコメントで分かってほしいことが書いてあって、ちゃん

と伝わったのだと嬉しくなった。

- ・今後の展開を、もう少し考えていかなければいけないと思った。
- ・調べ不足なところがあったし、自分から質問もできなかったのも、次回は頑張りたい。

5 成果

実践タイムではどの班も自分たちにできることを考え、アクションプランを実行に移した。具体的には、プラスチックゴミに関するクイズを作って解説するとともに校内に掲示したり、地域の商店にお願いして募金活動をしたり、差別に関する紙芝居を作って保育園で披露したりと様々だった。生徒は受け身の姿勢ではなく、試行錯誤しながら自分たちで考え、行動していた。

今年度、NIEに関して以下の2回の研修を行った。

期日	内容	指導者
10月12日(月)	NIE授業公開研修 SDGsワークショップ 気候変動	新潟市立東新潟中学校 校長 津野庄一郎 様
11月30日(月)	NIE1年次研究発表会 中間発表会	佐渡市教育委員会 指導主事 小田俊裕 様

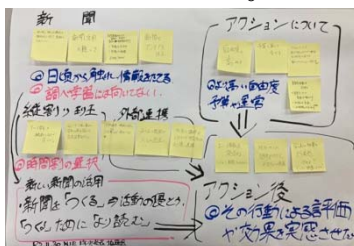
指導者からは、「21世紀を生きる生徒の資質・能力を育む」という研修主題の下、SDGsの学習と新聞活用を関係付けた本校の実践を価値付けていただいた。具体的には以下の3点であり、これらの要素が上記のような生徒の姿につながったと考えられる。

- (1)SDGsは学ぶべき今日的課題であり、その視点を学ぶことで主体的な探究活動になっている。
- (2)新聞活用が「問い」をもつための視点となり、生徒の問題意識をもとにした主体的・対話的で深い学びを実現している。
- (3)全校体制で取り組むことで、より効果的な取組となっている。

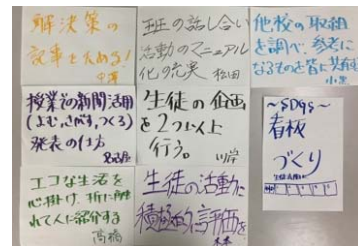
また、研修では来年度に向けた改善点を話し合い、その実現に向けて各職員が踏み出す一歩についても考えることができた。



協議会の様子



来年度への改善点



職員が踏み出す一歩

最後に、来年度に向けて以下の点について練り直し、本実践につなげたい。

- (1)目指す姿(資質・能力)の再考と共有。
- (2)新聞活用の方場の充実。(課題解決に関する記事の収集と考察等)
- (3)生徒の話し合い、発表、質問、振り返り、効果の検証方法等の充実。
- (4)創造的対話を促し成果を引き出す職員のファシリテーション力の向上。

(5)各教科・総合・特別活動との連動。

(6)生徒の変容を測る量的・質的両面からの調査・評価方法。

(7)地域の現状や課題を共有し、地域と協働した課題解決・地域活性の方策。

(小黒淳一)